党旗
青年版
第3号
1980・11・13
党旗社
編集・発行人　中村光雄
東京都豊田区亀沢3—27—3
マル青同中央本部
〒130 電話 (03)626—2481
関西地区事務所
電話 (06)349—2354

帝国主義打倒！
社会帝国主義打倒！
万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！
マルクス主義青年同盟

志願せよ！社会主義先鋒隊・救国募兵運動の一部署へ

——マル青同的前衛活動の社会化とマル青同的社会運動の全国民化の徹底的促進を戦取する秋期闘争の飛躍にむけて——

すべての青年・学生の同志友人諸君！

今日、政治情勢（ならびに社会＝経済情勢）が好きと好きざるとにかかわらず、これ迄は、それを正面から直視し、反應することを遠回しにさけてきたような人々にも、もはや否定しがたい形で、きわめて特異な戦時色彩を帯びてきたことは多くの人の認めるところになっている。

とりわけ、11/16の日「共」独自の十万人集会や、11/18の民青諸君の十年ぶりの全国統一ストライキ、それからみの11/21の社会党・総評の護憲全国統一行動を、10/21闘争の続絶を更に深化し、今秋期闘争の飛躍を促進するものとして組織していかねばならない。

皆、それをれっ六〇年安保闘争以来の大衆闘争としたが、「十年ぶりのストライキ」とか、日本の共産主義運動を勝手気ままに扱いはじめているが、誰も正面から言及一貫して、日本の共産主義運動の党史をあつかうということについては、自己防衛なのである。それはまさに、誰もが、日本共産主義運動の歴史的断絶——人間的変革活動における社会的断絶を意識し、その断絶そのものを生みだす根源を絶滅する情勢が到来したということなのであり、それは、マル青同的前衛活動の社会化とマル青同的社会運動の全国民化として組織されているのである。

戦時国家独占資本主義への移行——朝鮮戦争を媒介としてつくられてきた戦後復興——戦後革命から日「共」五〇年分裂をもってする日本共産主義運動の歴史的断絶に寄与してきた転向・性折文明と特殊的帝国主義的文明との取り引きの中でつくられてきた二重被内平和から右からも崩されていく情勢——をおおいに利用して、人間的変革活動の社会的断絶をうめつくしていく闘いの先鋒こそが、八〇年代の青年運動の責務である。

> 共産主義運動の全党史を公開し、人間的変革活動の社会的断絶をうめつくす
> 八〇年代の青年運動を開いこれ！
>
> すべての青年学生諸君！
> 戦時の自然発生性には、平時の「意識性」が抗議の声をあげている。

『自民党庄瑞後の反動攻勢、強権国家体制への危険な動きにはもう黙ってはいられない』と、かつての学者・文化人グループ・護憲学者グループ・平和グループ等々が、「最後の良心」の証しをたてるべく集い、『政治反動・生活破壊政策に国民的総反撃を』と曰「共」諸君が六全協以後に、いわば生きて、七〇年代の各層の理性は、「アレはアレで仕方ない」と初めての独自的大衆行動ののぼり旗を立てている、そしていっさいの政治評価を加えず、中間がることが唯一解党主義にならないすべであると心得ている。そして、この平時と各層の政党活動に対して、自己防衛をはかりながら、戦時へ入ってきた戦時の理性が、「コレではだめ！」と自己防衛になっている。これが戦時のキエ業性へと転化していくのが、そのまま戦時の貧識性へと転化していけるのが、ここにプロレタリア政党活動の焦眉の問題があり、戦時の意識性へと転化するためには、共産主義運動の全党史を公開し、ここからすべてに評価を下していくという社会化の義務を課していかなければならない。

そしてそれは、「人間的変革活動の社会的断絶があるから」こそ、その根源そのものを絶滅することができる」として戦後二十年をそなえなければならず、その歴史こそマル青同の全党史であり、革命的大衆行動の後の諸分解を正面から統合することなしには前衛党建設はありえないのである。

軍事的封建的帝国主義への人民民主主義闘争から、日本帝国主義の復興期の闘争への転換の中で、戦後革命で獲得・動員した生命力を次の革命に組織するための「国家独占資本主義」、社会主義のために利用するというの復興建設の飛躍に失敗したのは、徳田球一の親鸞闘争の継承のしかたの中に

九青同 関西方面隊

低文明があったからであり、この問題を正面から扱わずに家父長制をもって、ブルジョア民主々義から転落し、反共主義・解党主義への自己防衛で帝国主義をあつかい、反帝闘争や民族闘争への綱領を流していったのが、宮本君の転向・挫折の問題である。

ここから出発して、日共と一体になわる前衛党建設をめざして、六〇年代を闘い、六〇年代後半の闘争をレーニン主義の復権と社会化として、革命的左翼が、いわば城内平和を左から解体し、帝国主義のあらゆる文明を解体しきってのみ、党的飛躍の条件をかちとることができるとして、六九年一一月決戦をうちぬいたが、内乱・解党を組織する党の敗北に失敗したのである。この敗北の後、発生したた七〇年代初頭の解党主義の嵐の中で、解党主義への私的理解をうち砕きつつ

この日本共産主義運動のたび重なる歴史的断絶行きつかるとこなかった思想方法・工作方法そのものを廃絶し、永続革命の展望の解明に他ならず、工作方法へと転化していったのマル青同の運動の根源的根源をそのものを廃絶していくいとは、転向・挫折を生み出す根源をそのものを廃絶していく日本共産主義運動五十年を統括する闘いであったのである。

そうであるが故は、七〇年代の十年間につくられてきた政党関係とは、単純に無知で、わが党活動を知らなかったというよりも、わが党とのかねあいで、自らの位置をつくり、ある種の警戒をもちながら、それをかくしてきたものなのである。この転向・挫折の文明を生み出すべくしてある政党構造を媒介物として、「指導者のために働く」という社会主義人の中間駅人と組織していかなければならない。

2 指導者のために働くことを拒絶する転向・挫折の文明を廃絶し、社会主義先鋒隊・救国募兵運動の一部署へ!!

すべての青年学生諸君!

現在の政治情勢をどう評価するのか。

今回のアメリカ大統領選挙と連邦議会選挙で、レーガンと共和党が圧勝した。一九三〇年代以来、アメリカ帝国主義を支えた「ニューディール連合(ホワイトハウス・東部組織労働者・黒人票・リベラル派)」とよばれていた民主党の階級基盤そのものが崩れ、この構造が作動しなかった。

共産主義人ストレートにいなかに、この資本主義体制の中で、人間的に理性的に生きたいという転向・挫折の構造がくずれたものであって、一時的には、右からくずれたように見えるが、全世界的にこの構造の崩壊が進行しているのである。日本でもダブル選挙という二つとでくずれ、いわば体制内クーデター―非合法的手段で、反共翼賛の政権が歴史のウラをかいて揺っていくことになっている。

そして今や、国家独占資本主義は、戦時の配価利潤をめぐって、そのことは、必然的に共産主義をめぐって分裂していくところにいきつく。被指導者のために働け!ということを要求することが始まり、一方は公然と反共主義に転換し、共産主義にぶっつけることを介して要求し、他方は、日共の方法を探求して分裂していく。共産主義者はこの分裂を利用し、「指導者のために働く」ことのできない文明を解体し、共産主義へ行きつくように組織しなければならない。そのためには、戦後三十年でつくられた政党構造をうつこと利用し、ブルジョア政治の構造が分裂を明白ではじめ、必要以上に自分たちの力を弱めるという情勢一利用できなければならない。

戦後35年間でつくられたわが国の政治諸関係・政治構造とは何か、明確に理性あるものは、日本「共産党」を介してこれをめぐって諸構造はつくられていることは明白である。

六〇年代後半に新左翼は、日共を介して党をつくろう―日共と一体になろう党を、として闘いぬき、この挫折と転化に失敗した。ここで失敗しているが故に、(この結果、多くの人は、この転化の形態を見れなくなった)、日共の理性も、新左翼的理性も、ブロ独から転向・挫折以外の何ものでもないのであり、このことを刻印すべきしての共産主義運動の総括とは、空文句に他ならない。レーニン以降、共産主義運動の歴史的断絶をうめる仕事は、ごく少数のものの手によって解党主義の根源そのものの廃絶―共産主義的思想・方法・工作方法を手にする所へ、つきつき、七〇年代の一時代を、綱領そのものをあつかい、綱領闘争通りに組織をつくることとして共産主義運動の全歴史を掌握しきってきたのである。

そして今日、共産主義運動の社会化・マル青同的組織活動の社会化は、今日つくられている「日共」を媒介とした二の諸構造を介する以外になく、この諸関係をブロゴー予備軍として社会化していく以外にないのである。

しかり! 九五パーセントの人々は、国家独占資本主義を介する以外に社会主義に移行することはできず、この中間駅を通ることを恐れてはならない。

今日多くの人々は、この中間駅の入口までできているが故に、この前で不安がったり、自己防衛になったりで、自分でも他人でも説明のつかない現象を生活の中で演じているのである。

日「共」は、この中間駅の入口でたたずみ、うしろを向いている。そのことは、戦時国家独占資本主義を恐れており、ブロ独を恐れており、国有化を恐れており、戦時国家独占資本主義の分解と破綻を恐れているに他ならない。

社会党―日共への コンプレックス・ブルジョアの後貧の下でのみ、日共との不徹底をつくことができる。党の防衛という意識さえなく、総括はいつも「情勢」でごまかされたり、もっとブルジョア政治のウラまでわかっていたら、というものであり、支配階級のどちらに加担するのか、この文明しかもっていず、ここを介してしか社会主義へ接近できない。

公明党―もっぱら、戦争をあつかえる政党構造の力関係の中でしか、政治方針を自主的にきめることはできない文明であり、戦争への移行で、右からも左からも駆逐の対象である。

民社党―徴力からオコボレをどれだけ多くとるか、一番有効にありつけるやり方は何か、この文明を介してしか、社会主義へ接近できないハイエナ集団である。

ここでの革命工作者・革命生産階級の指導論理とは、「国家独占資本主義は社会主義にたんれば、全く遅れているが、私経営資本主義・小農経営にたんれば、一歩も二歩も進歩である」に他ならない。きょくにこの点で、日共には、わが党に比べれば全くの転向・挫折であるが、わが党への ぶっつけは、社会党や青年党に比べれば、数歩も前進なのである。

このことを見れないものは、社会主義への移行の本質を何ひとつ理解しておらず、あきメクラに他ならないのである。

3 マル青同的前衛活動の社会化とマル青同的社会運動の全国民化を徹底的に促進する八〇年代の青年運動を闘いとれ!

すべての青年学生諸君!

八〇年代の青年運動とは、人間的変革活動への社会的断絶をうめつくし、転向・挫折の文明を生み出す社会構造そのものを廃絶していくものであり、従来の反政治的・当面の利害的見地や戦争への恐怖から提起していった大衆運動と根本的に手を切ったものである。そうであるが故に、論理の中に自己防衛をつくらなければ、勇気を描き出せないという文明しか想定感的自己防衛的論理ないから、大衆運動ができないという城内平和をもっとも促進してきた文明―と徹底して手を切り、人間的変革活動を連続して更新していくことができる。

統一した政治目的と革命行動のみで組織する大衆運動であり、「参加すれば何かがえられる」といった過程としての組織化を廃し、社会運動であり、「指導者のために働く」という中間駅を通ってのみ、社会主義へいけることを刻印しなければならない。

すべての青年学生の同志諸君!

自らの歴史的社会的階級的責務をつかめ!

社会主義先鋒隊・救国募兵運動の下へ志願せよ!

一九八〇年 一一月 一三日